



引きこもりの若者に お寺を開放した住職魂

福岡 真宗木辺派宝樹寺カフェエテラに学ぶ

お寺をどう活かすかは住職の思いによる。全国に七十万人ともいわれる引きこもりの若者に門を開いた住職がいる。北九州市の真宗木辺派宝樹寺、林義淳住職（四十四歳）だ。自らの体験が背中を押した。

Café☆Tera
でおしゃべりしたり、スマホでゲームをしたり、本堂でゴロ寝したり。近くの海岸へ散歩に出かける参加者もいる。

「引きこもりの自分と重ねて」

悩みを抱えた若者が心おきなく過ごし話し合える居場所を提供し、社会に出一歩を踏み出す力を養うための活動に取り組むのが、同寺の林義淳住職（四十四歳）だ。

「引きこもりの方たちは、生きづらさを心に抱えています。お寺は仏事が大切ですが、悩みを抱えた人が気兼ねなく立

月に二日だが、土曜日の午後になると、様々な要因で社会参加の場面がせばまり、就労や就学など自宅以外での生活の場が長期にわたって失われている「引きこもり」の若者たちがやってくるお寺がある。福岡県北九州市の真宗木辺派宝樹寺が

催す寺喫茶「Café☆Tera」（カフェテラ）である。

お寺に集まったからといって別段かしこまる必要はなく、過ごし方は各人の自由だ。お茶とお菓子を楽しみながら、ゆったりとした時間が流れる。参加者同士

ち寄れる、社会に開かれた場所であるべきという思いも、現在の活動に結び付いています」

と話す林住職自身、生きづらさを抱えて青年期を過ごしたという。

先代住職の次男として生まれ、浄土真宗本願寺派の養成校、中央仏教学院（京都市）に入學し得度したものの、僧侶にやりがいを見出せず虚しい気持ちのまま卒業。自坊には戻らず、生き方の答えがなかなか見つからない。その頃、唯一の心の支えであったパンクロックのバンド活動に没頭した。そんな折、母親と兄が病気で入院したことから、平成六年から

自坊に戻らざるを得ず、兄の代わりに法務を手伝うことになる。こうして門徒と接するようになると、「こんな自分でも人から必要とされている。自分の存在が認められている」という感覚が芽生え始め、「自分を必要としてくれる人に対して、僧侶として少しでも役に立ちたい」と、改めて仏教を学び直したのである。

平成十九年に父から住職を引き継ぐ。

晋山にあたって、今後自分に何ができるのかと考えた林住職の目に留まったのが、「当時、問題視されていた引きこもりの方たちの姿でした。以前の自分と同じく、生きづらさを心に抱えている人たちが、出口の見えない悩みに苦しんでいる若者みんなあの時の自分に見えました。と同時に、一人でも親身になって耳を傾けてくれる大人が傍にいたら、どんなにか心強いのではないかと感じたのです」

「普段着の雰囲気をソングで伝える」

「Café☆Tera」を始めたのは、平成二十年十一月。北九州市で引きこも

り支援を行うNPO法人「STEP・北九州」で活動の要点を学び、同法人で支援を受けていた人たちに「お寺でも支援をしよう」と思っているの遊びにきてください」と声をかけたところ、さっそく団体の代表者と共に数名が訪れた。以後、参加者は順調に増え続けたのだ。

毎回十数名が参加し、年齢層は二十代後半から三十代前半が中心。

「私とそれほど年齢差がないからか、支援者と受益者というような堅苦しい関係ではなく、兄弟か従兄弟のような付き合い方になっています。彼らと接するときは普段着です。法衣や作務衣だと緊張させてしまうと思うからです」（林住職）

そんな「Café☆Tera」の雰囲気は、平成二十一年から毎月一回、宝樹寺がホームページで配信しているインターネットラジオ番組「カフェトーク」で聴くことができる。林住職は、

「『Café☆Tera』に参加しようと思っても、他人と交流することが苦手



お寺を生かす宝樹寺の林義淳住職

になつていて人にとつては、なかなか足を運びにくいものです。実際に利用している参加者と共にネットラジオ番組を作り、声を通してその場の雰囲気伝えることができれば、躊躇している人の不安も軽減して足を向けやすくなるのでは」との思いから「カフェトーク」を始めたという。収録に参加するのは林住職



宝樹寺のインターネットラジオ「カフェトーク」

数の少なかつた参加者も、回を重ねると会話のキャッチボールができるようになっていく。それまで自分の考え方だけに囚われていた心がやわらぎ、他者と接してその考え方に触れる機会が増えることで物事の見方や考え方に変化が生まれる。引きこもり経験のある「Café☆Terera」スタッフ二名の存在も、環境づくりには大きい。参加者からは、「経験したことや理由はちがっても、生きづらさを感じている者同士なので、ここは安心できる」「自分と同じ趣味を持つている人がいるので自分の趣味嗜好を気兼ねなく話せる」といった感想が寄せられている。参加者の九割はリピーターで、そのうち約半数はここに来てから仕事に就くことができたようだ。引きこもり状態を脱して社会参加へ第一歩を踏み出す場として着実に成果を上げているのだ。

お寺は心休まる最高のシェルター
引きこもりの若者は平成二十二年の内

と引きこもり経験をもつスタッフ二名に加えて、「Café☆Terera」の参加者が数名。「Café☆Terera」が催す山登りやカラオケ大会などのイベント情報、最近見た映画、旅先での出来事など、話題は様々。およそ五十分に編集し、ホームページにアップロードする作業は、林住職が自ら行う。出演者のリラクゼーションの様子が目につくように「カフェトーク」のリスナーが実際に「Café☆Terera」に参加するようになった。

情報に惑われないで回すことにする

八年目を迎えて、今や軌道に乗った支援活動だが、開始当初は不安もあったと林住職は話す。
「始めるまでは、メディアで紹介される引きこもりのイメージが強く、無気力で気難しい性格で、接しにくいタイプの方たちだろうと身構えていました。また、若い人にはお寺に対して抵抗感があるのではないかと不安もありました」
しかし、実際に参加者と話してみると、

闇府調査だと、全国に約七十万人もいるという。当人のみならずその家族を考え合わせると、数百万の人々が悩み苦しんでいることになるだろう。宝樹寺のような支援活動が多くのお寺に広がっていくことが期待される。取り組む際のポイントを林住職に聞いた。

「お寺単体で始めようとすると、支援のコツを身に付けたり、準備などが大変です。すでに地域で引きこもり支援に取り組まれているNPOなどがあれば、お寺から協働を持ちかけて協力してもらおうとスムーズに支援活動を始められるでしょう。私の場合も、お寺単体で活動を始めても、対象者に信者獲得の勧誘活動と思われかねないと考えて、まずは地域で活動していた「STEP・北九州」に支援のコツを学びました」

安易に取り組める活動でないことは確かだろう。林住職は現在「STEP・北九州」の理事も務め、ボランティア団体などと連携しつつ活動を展開している。

確かに言葉数も少なく会話の受け答えの間も長いとは感じたが、決して接しにくくはなく、「メディアが発信するネガティブな情報に惑わされてはいけない」と感じた。また、お寺への抵抗感どころか、木造建築で広い本堂や畳敷きの部屋は、参加者にとつて安心できる居心地のいい場所だと分かったという。

不登校だった人、大学卒業後も就職先が見つからなかった人、職場の人間関係に「つまずいた人など、参加者の今に至る理由はそれぞれだ。そんな参加者の話に林住職は真摯に耳を傾ける。

「仕事上、月忌参りなどの際にお茶飲みがてら門徒さんのお話を聴き続けてきたことで、傾聴することの大事さが自然と身に付いたのだと思います。それが、引きこもりの方たちとの交流にも役に立ちました」

こうした姿勢が引きこもっていた心を少しずつほぐしていく。他人との会話にプランクがあることから声が小さく言葉

林住職はこうも話す。

「世間の常識やルールに縛られないお寺という空間こそ、日常生活において精神的に追い込まれた方たちの心を一休みさせる場所に、うつつの場所だと再認識しています。寺院は市民の心を休ませ回復させることができる機能を備えた施設、いえ、もともと心を休ませる社会的シェルターだと思っています。参加者と接しているときは、気持ちのうえでお坊さんの衣を脱いで、支援者ぶらず、こちらからくだらない話や失敗談、僧侶にもある悩みなんかを話しかけると、参加者と打ち解けやすくなるのです」

支援団体とのネットワークを築きつつ、お寺という安らぎの環境を最大限に生かし、悩みを抱えた人に自然体で接する。

お寺の「Café☆Terera」「カフェトーク」を通じて、こわばった心を解きほぐしてきた林住職の活動からは、お寺だからこそできる社会貢献のヒントが見えてくる。